昭和時代、北摂のある警察官

元木 勇とその家族

元木洋美 著

昭和時代、北摂のある警察官

元木 勇とその家族

善通寺予備入隊　16 歳（写真右）
昭和 18 年頃　木陰での制服姿（写真下）

まえがき

私と父との間に持てた時間は、家族の中で一番長かった。ユニークと思われる程の怜悧(れいり)判断を持ち、間違ったことに対する短気さと負けず嫌いさも持っていたが、その反面人を思いやる優しさと温厚さを持ち、弱い人にも面倒見が良かった。現代では奇特な人間だ。職務では派手な業績は残さなかったものの、生存中はかた時も怠けることなく、六十四歳で没した。

父は生来頑健で、心臓も強いほうだったが、父が短命だったことについては従兄からも「悔しい」と言ってもらい、私は強く心を動かされた。

過去のことを振り返っても始まらないと言われるのが落ちだが、父が一所懸命身体を酷使し、誠実に生きた証(あかし)を書きとどめたく、本書にまとめた。父の強い精神力は、恵まれた現代社会では市場経済主義を求められ、合理性を求められている故に合わないかもしれない。

また、合理性の上に切り捨てまで求められる社会では、父が日常的に、日頃口にしていたことは、前時代的な精神主義と映るかも知れない。常々「ボロは着てても心は錦」「武士は食わねど高楊枝」を口にしていたが、もう一言「人は一代、名は末代」とも常に言っていた。

押し付ける古さだけでなく、個性を認め、良さを生かす素養ともなり、人となりが生き方に出るので、これも付言しておきたい。

［父が生きた時代］

父が生きた時代は、明治末期から大正、昭和の黎明期であった。近年における日本の戦争は、大正三年から始まった第一次世界大戦後からの二十数年を含めて第二次大戦終戦まで続いた。父は大正十五年から昭和三十一年までの戦中戦後にかけての三十年余りを巷間の警察官として勤務した。

まさに壮年時代は、戦争の渦中にあり昭和十年代は厳しさを増す戦禍や戦闘の中にあった。国内にいた日本国民は銃後の身に晒されていた。

父「勇」は源を辿れば戦国時代まで判明できる下級武士の係累を持つ身として出生した。曽祖父は慶応時代末期の生まれで元木平太郎といい、その長男・粂次郎（明治八年生まれ）の三男として明治三十六年に生まれた。父粂次郎の信仰の習わしは朝夕の読経を家族揃って勤めることだった。子供たちにも大人と同様厳格に習慣づけた。

実家の信仰は浄土真宗でありながら、中に入れば厳しい戒律を持ち、近い親族の祥月命日

を「精進の日」として終日魚や肉の生臭いものは、徹底して食してはならず、近づけないとした生活だった。仏壇の花器には供花を上げて、佛飯器には白米系のもの、別器に清水かお茶を毎朝入れ替えて奉げた。家族皆が幼児の頃から経を読め、家族は押し並べて皆達筆だった。書の嗜(たしな)みは勿論、日常の礼節には厳しかった。また言葉づかいに堅苦しさはないが、標準語に近く、礼を重んじながら、軽く配慮を要した。生活に贅(ぜい)はないが質実を為すものだった。

一五四一年に来日したフランシスコ・ザビエルは、「日本人は貧しいことを恥ずかしがらない。武士は町人より貧しいのに尊敬されている」と驚いた。

「武士は刀を持っていたから尊敬されていたわけではない。高い倫理道徳を持ち合わせていた故である。江戸時代から明治時代にかけて、日本ほど金銭至上主義と縁遠い国は少なくとも欧米にはなかったと思う」と藤原正彦も説いていた。

現在の日本では物や金銭に恵まれ合理的な市場原理主義が行きすぎて、礼儀や恥、相手に対する思いやり、奥床しさなど余り感じられず、想像さえできない人が多い。

父が幼い時期の明治時代末には、まだ恥や謙虚さのある道徳観が老若男女にも残されていた。恥や奥床しさの共感も持たれ、信じられていて現代とは隔世の感がある。

明治時代末期、父六歳の時、六歳年上の長兄が近所の悪戯小僧に泣かされて帰ってきた。

相手を懲らしめるために、長い物干し竿を持って相手を打ち負かしにいったという一本義で正義感のある子供だった。当時隣近所では長く手柄話として伝えられた。

父の曽祖父・平太郎の父が江戸時代末期に寺子屋で、書道や読み書きを教えていたことを、昭和三十七、八年ころでも覚えていた人がいた。四国T市の銀行で、長姉が隣り合わせた元木姓の老女から実際にこのことを聞いた。

父の生家は家の横を一間ほどの清流が流れていたが、十数軒南には吉野川の大きな支流があり、その大きめの川では夏に鮎が取れ爽やかだった。

その昔、四国八十八か所巡りで弘法大師の教えに続いて、お遍路のお参りは千年近く前からあった。お伊勢詣りとの相乗効果で、江戸時代には一層盛んとなった。信仰の対象もあったが、民家では自分たちが巡行のお参りをする代わりに、奉げものをしてお遍路さんに参っていただくという同行の意味でのお接待を大部分の家はしていた。お遍路さんに供養や奉げものをして、また各家庭はお米や小銭を供養や奉げものとして貢いでいた。

祖母のテルは大変優しく慈悲深い心を持つ人で、お遍路さんに交じって乞食や物貰いに来る人達も大勢いたが、祖母はこの人たちが行列をつくっていても、散髪をしてあげたり、風呂にも入れてあげていた。尤も当時、伝染性があるかと思われるモノもらいを持っていた人

も中にはいたという。なかなか常人にはできないこととして、近隣では少し知られた存在の様子を呈していた。

父は三男坊の男子で末っ子であり、とても可愛がられ、祖母は自分の食べる分の芋などを何時も家族に知られないように父に与えた。

小学校を卒業した後、青年師範教育研修所を終えていたので、国語や社会、体育の準教員の資格を取得していた。

卒業後国鉄職員となり、改札係を職務とした。父が親切で好青年だったので、当時まだ珍しかった恋文を二、三通もらった。それも相手は、後の喜劇人の妻で、夫と共に大阪南の喜劇舞台に立ったK嬢である。一方の男性は鼓を持ってあいの手を入れていて、年配者には人気があった。この話は父の姉である伯母からで、二回聞いていた。K女史はまだ品格のある方で、大御所というよりおばさん先生という雰囲気があった。

父の郷では、まだ大阪で名を上げるには舞台人になることがてっとり早かった。新国劇の若手で人気があった柔道家の男性Hは、清潔な感じのする俳優だった。もう一人は浪曲師のB軒O堂という人で、節回しも声もよく、当時は大御所の一人だった。

父は当時流行っていた映画の弾き語りに合わせるヴァイオリンを弾いていた。何でも若い

女の人が、何人も追いかけてきた。と、これも従兄が知っていた。

祖父は若い女性のする薄っぺらな追っかけは、破廉恥（はれんち）なこととして嫌い、怒ってヴァイオリンをたたき割ったほどの人で、判らず屋の頑固者かと考えたが、昔の人として堅物で清潔だったのだ。一方曾祖母モトと、母方の曾祖母萩とは気が合い、父が母方のA家に、始めは婿養子の形で旨く言いくるめられて若くして入った。

一方、母方の実家は地方の名家で、市内から少し離れた山手の小高い細い道を上がった所に、村でたった一つの蔵がある家であった。祖父は村会議長や庄屋をして、明治時代には学芸委員もしていた。祖父の信賢（明治十五年生まれ）は小柄だったが賢明で温厚、勇気もあった。手広くしていた商売は神山を通る鮎喰川の上流から木材を流す運搬業もしていた。家には馬を止める駒停めが八か所もあり、人夫を何十人も雇っていた。使用人は十里離れたところの人でも信用され、使用人が旅の途中に急な物入りで、持ち合わせがなくなり、日が暮れてしまったときも、A家の名を名乗れば返事ひとつで宿を貸してくれた。

父が母の実家に入ったのは、母の弟が十歳も年下でまだ七歳だったので父の力が欲しかったのだ。この件について、母方の従妹のY子さんが昭和の末頃までに叔父から聞きおよんでいた。父は気位が高く、実家では大事にされていた。祖母テルには殊のほか末っ子で可愛がられ

ていた。母方の実家の商家の仕事は父にとって馴染みがなく、勝手が違い、まだ畑仕事を手伝わされ、まんまとしてやられたようになった。

一方、大正時代半ば父の姉が嫁いだ先は、大阪市内だったが、夫は三十歳そこそこの人だった。伯母から父への紹介の職業は、当時人気が出ていて、大変就職が難関な巡査、後の警察官を募集しているから、受けに来ないか？　と誘われた。素直な父は自分に向いているのではないかと思い、喜び勇んで関西汽船の客船で、神戸港廻りで大阪に向かった。

受験には伯母が知人から借りてくれた書生風の袴姿で受けたが、種々困難な試験だった。面接時の試験では、「鉄道線路のカーブで、内輪と外輪で曲がるとき、車幅は変わらないのにどうして曲がれるのか?」、もう一問は「夏と冬のレールの違いにつき、冬期に短くなるのはなぜか?」、この問題に父は難なく正しく答えることが出来て合格できた。

面接に行くまでの身元調査が今では想像出来ないほど厳格で、身持ちが堅く、良い家族、係累でなければ合格することが出来なかった。受験場の練習所では、試験日には門がある塀の周りを何百人かが列を作って取り巻いていた。合格するのは三十人だった。数年すればその厳しさから、同期の人は脱落者が出て半数の人員となり、定年退職までに残るのはひと握りで十人にも満たないほどだったと聞かされた。

［元木勇、明治三十六年生まれ］

大正十五年、大阪府警察部巡査拝命。研修が終了後、初赴任先は三島郡石河村駐在所。昭和三年に大阪近郊の三島郡石河村大岩、現在茨木市内北西部にある村の駐在所に赴任する。昭和二年当時、村の人口九百十一人、百六十一戸（市史編纂室調べ）。茨木駅から六キロメートルほどの所で、かつてはバス便も少なかったが、高山右近と関わりのある隠れキリシタンの里で近年有名になってきた近くの千堤寺手前の所だ。旧亀岡街道の西、旧西国街道の北方にある。亀岡に近い山頂までの中間地域となる穏健な、農村地帯の駐在所に配属されることになった。昔ながら人通りや物の運搬はあったが、冬の寒さは極寒であったと察する。因みに北部山間部地帯の農産物は冬の厳しい寒さを示す寒天やウドだった。

次の赴任先は、当時の府庁舎近くの西区にある川口警察署だった。当時の西区に府庁舎の江の子島本館があった。川口署はその近くである。当時の西区は大阪港に近かった。主な輸送には交易のために船を使い、外国船や外国人の多くが行き交い外国人居留地が近くにあった。レンガ造りのモダンな建物や歓楽街があった。当時はとても賑やかで、現代でも、その

痕跡は遊郭跡や建物にも残る。当家には、昭和初期と思われる西区の大きなY店（たな）の商店前で、五十人以上の人が戦士として出征する人のための記念写真が残っている。Y店の大きな商船会社があったと後ほど知った。裕福な商家前の写真からは、まだ死ぬため外地に行くという悲壮感は、あまり感じられないように思われた。

さらに旧茨木警察署に勤務

昭和五年頃から、当時町の中心部に転勤のため転居した。現市役所、今の所在地より茨木川の二百メートル東方で、まだ消防団用の「火の見櫓」があって、「町役場」や「保健所」が近くにあった。警察署所在地は、確か旧保健所の前、茨木神社の東南角にあった。そこは、町の中心部だったが、近くの長屋風の所に居を借りた。この頃ようやく母や長兄と長姉を呼び寄せて、父にとって家族団らんの時を持てた。傍にはH座という当時では、大きな映画館があり、娯楽のない時代で人気があった。町で一番の料亭も近かった。

昭和十一年に再度転居して、茨木神社近くで北仲之町のM寺近くにある長屋の中の一軒家を借りていたが、昔のことであり近隣の皆さんには、尊敬と信頼の目で温かく迎えられた。

ここでは十一歳で夭折（ようせつ）した次女昭子姉と三女の富子姉が生まれた。ここで知り合った人では隣家の子息が昭和時代末期に茨木市長になられた。

もう一人近くにあった名家の女性は後の三十年代に、私が十歳頃、昔の感覚でお金を借りるため無心に来た。だが古い町民は、気概や気風をもっていたが、昭和二十八年頃に私宅が自宅を建てたと聞き、当家に財力があると勘違いしてくる人がいた。三十年代はまだ自分自身で自宅を持てる市民は少ない時代だった。

［玉櫛村駐在所時代］

玉櫛村に昭和十三年頃から約十年間程在任した。旧京阪電車（現阪急）茨木市駅の近くにあり、近郊の駐在所だった。戦争がなければ長閑（のどか）で豊かな村だった。昭和十六年、第二次大戦勃発となった時には玉櫛村に在勤していた。古い村だが父は温かく期待をこめて迎えられた。村では戦時中で男性も少なく、父が巡回や連絡で不在時に、村民が多く尋ねてきたが、母は父の代わりをして応対をしていた。父の代わりに夫婦喧嘩やもめ事相談も軽い話であれば相談にのっていた。

この地玉櫛では家族の運命を大きく変える出来事があった。大正十二年生まれの家族にとっ

ては誉れ高い長兄が夭折した。存命時には父の同僚から「鳶が鷹を生んだ」と言われた兄だった。長兄保は当時、不治のやまいである結核で昭和十九年二月に没した。

母の実家は地方では村会議長をしていて財力のある庄屋であり商家であった。長兄の入院時には祖父はベッドの下に敷き詰められる程の紙幣で、当時は持っている人が少なかったほどの枚数を持参していたが、当時よく効く薬や良い病院もなく、兄は片意地さをもち、母の気弱さもあって、病に負けて兄という大きな宝をなくした。

亡兄は名門中学で一年生時は勉強せず落第、勉強はやれば出来るので、慌てて気を取り直して奮起した。一年生で剣道部の主将、十五歳で初段だった。当時はまだ初段の人は珍しくめっぽう強かった。ここでも父より強かった。冬の寒稽古は想像できないほど厳しく、午前四時、五時から起床して登校し、足袋も履かずに裸足で打ち込みの練習をし、道場の床板を速くすり足をした。

また父に似て生まれつき達筆だった。残された書は写経のように優しく清く、知的に鋭かった。持ち前の負けず嫌いと志は高くあったので、母は恐れていた。

兄は当時まだ旧制の中学生時代に、茨木地方の古寺や謂れを探求していた。茨木では名所とされた歴史的遺産の多くを郷土史家のように調べていた。安威村北部の継体天皇の古墳も

あったが、茨木童子の謂れがある場所は茨木高校の東側の細い旧街道にかかる小さな石橋にもあった。他の土地も訪ねていたことを書き遺した記録がある。

兄が描いた古い地図を、平成十年代のはじめ、駅前実家の改築の際に弟が探し出してきた。横六十センチ経四十五センチの大きさであった。七十年ほど前の和紙に書かれていて少し黄ばんでいた。茨木中学時代、歴史教科の授業時に、生徒たちに書かせたもののようだった。奇しくも書いてあった場所は、現在の実家近くの市の中心部の地図だった。色付けは大まかで黄色や黄緑が薄れ、かすれて薄くなっていた。美しかった字は几帳面にしっかり書けていた。田畑や茨木神社の記号も記されていた。当時のことで地主のある所はおぼろげだった。ともかく、七十年以上も前のことで畑や農地ばかりだったが、土地の所有者が判明するところは書いてあり、元になるものには判読で困難な所があったと目される。地図は少し黄ばんでいただけだったので、弟より処分を任されたが、この紙は場所をとり他所にも確かな資料は残っているのではないかと推し測って処分してしまった。

戦時中、兄自身は陸軍士官学校に行くことを望んだが、この件は止められた。十八歳の時に天王寺師範学校に合格し、当時の兵役体格検査では、父と同じ甲種合格だった。外地に行かずに済んだ。兄は秀才の方に入っていたので、父の警察官の同僚からは、「鳶が鷹を生んだ」

とよく冷やかされたものだ。

十七歳の時、兄の考古学に結びつく、石の研究用に買った鉱石の標本箱は、Ａ４の大きさで厚さ五センチあるが、中は二段になっていた。木箱には古式の薄緑色で錦模様がついた薄手織物の生地が貼ってあり古くなっていたが、ずっと大事にされていた。中には、二センチくらいの桝のしきりがあり、鉱石たちは合計四、五十の目の中に入っていた。

珍しい貴石とされる水晶、紫水晶、金剛石や銅の原石もあった。おそらくその時代でも高価だったと推測する。父はサラリーマンであり、母はよく工面したものだ。天王寺区にあった学生寮からの便りが昭和五十年代に残っていたが、とても十八歳に思えないほど綺麗で几帳面に書かれていた。生計や小遣いの収支報告だった。兄の厳しい生活が窺われ、伝わってくるようだった。

兄は、師範学校通学時代、病気療養のため自宅から少し離れた家を借り、母や姉が食事を運んだが、姉は兄が残した食事を食べても病は移らなかった。因みに兄の成績は常に上位だったので、三十代で校長になれるのではと噂された。

自宅から中学生時代の道場へ、冬の早朝四時、五時に足袋もはかずに裸足で、下駄のいでたちで寒稽古に通った。体力に対する驕りがあったのだ。病魔に侵されるまでは、玉櫛村近く、

数軒の小学生の家庭教師にいっていた。師範学校の実習では十人ほどの女子小学生との写真が五枚あり、兄の人気が分かる。大学付属の小学校に来ている女子は良家の子女たちであり胸には強制はあったが名札を着けていた。

残された兄の日記には、茨木で古く市民や町民から愛着を持たれていた史跡のこととともに、星座には兄の思いがあり天空の深い紺碧の夜空には、オリオン座、北斗七星など煌めく星座の位置が手に取るように明記されていた。ギリシャ神話からの説明も透き通った文面で書かれていた。昭和十七、八年のことで、日中の空は戦闘機が行きかう灰色の空で、夜間は深く闇夜だったろう。

昭和二十年三月の大阪大空襲の折には、同時にあった茨木における影響として、玉櫛村南方の所の名にある「島（しま）」や「真砂（まなご）」（現在はまさご）という当時の呼称住所名では、何十人かが焼夷弾の犠牲となって亡くなり、また近辺の多くの家が焼け落ち多くの犠牲を伴った。父は、犠牲者の確認を同僚とともに行った。

玉櫛村駐在所で、不幸にも長兄は昭和十九年二月に没す。続いて次姉昭子（昭和八年生まれ）も十九年七月に没す。父母の悲嘆は計り知れないものだった。人からは肩身が狭いとか、子供が親不孝だなどと心無く言われた。

この次姉にはしっかりとした字で書かれた少学五年生の日記があり、語録が残せるほど優秀で誉れ高い記述があった。当時、今と違って父の呼称はお父上様で、母はお母上様だったが、当時は少し格のある家では皆こう呼ばれていた。次姉は腹膜炎で亡くなった。四女洋美はその一年ほど前の昭和十八年に生まれた。次姉によく似ていることで、祖母は洋美を呼ぶときに、いつも洋美を呼ぶ前に、律義に「昭子さん、富ちゃん、次にやっとヒロちゃん」とつないだ。

大阪大空襲

昭子姉に対しては私と生と死の間が短く、相前後していたからで頭脳の差はあるが顔立ちも似ていた。

玉櫛村時代、親しくなった韓国人（当時南鮮）のKさんは当時在日の人で、植民地化されていた南朝鮮出身だったが、終戦少し前の時一時的な政策により段階的に帰るように措置されている時期があった。全面的な強制ではなかった。父の親しい同僚が、Kさんに縄をつけて連

行しようとした時に、父が道中で偶然見かけた。父が「何故Kさんを連れて行くのか」と聞くと、Kさんは困った顔をして「わからない」と父に言い、「Kさんはそんな悪いことをする人ではないから」と言って放免してもらった。事実Kさんはまじめで優秀だし、皆から慕われていたと長姉の話だ。

大阪市や京都市など残留朝鮮人、韓国人が日本に連れて来られて、そのまま多くいたので、残ることは許されていた。以来Kさんから深く感謝された。昭和二十三年Kさんの南鮮に住む妻が亡くなり帰ろうとしたが、葬式用の顔写真が身分証明書用の小型分しかないと泣かれ、父が懇意にする写真館に依頼し通常の大きさに引き伸ばしてあげた。大変喜ばれた笑顔が私の記憶にある。

数年後のKさんは、こちらの生活が落ち着いた後は、当家の夏期の大掃除や冬の餅つきには必ず顔を出して手伝いをし、半日以上かかることをしてもらった。不思議なことに母は、あまりお礼を出さなかった。時代も時代だが、もう少し気を遣ってあげればいいのではないかと疑問に感じた。その後の五年ほどは律義に欠かさず来られていた。その後、彼は同郷の人達を集めて、茨木で郷里の宗教の支部長か宗旨の先生として奉られる程の生活をした。

［茨木市倍賀駐在所］

玉櫛村からの転勤に伴い、国鉄茨木駅の北側に面する倍賀と呼ばれる駐在所にトラックに乗って向かった。私が四、五歳時、助手席に乗ったと思うが、抜けるような青空だった。聞くと九月だったようだ。私は四歳だったがはっきり覚えていた。国鉄の赤い橋のあるガード下を通って、旧丹波街道から国道一七一号線に出る道までの間、左側にある南西側へ曲がった所にあった「へか」という住居呼称はアイヌ語からきていると、平成二十一年秋の市報に載っていた。少し変わった呼び方だった。「春日」は古くからの呼び方であり、全国各地にあるが、神社と関わりがあるのだ。へか駐在所はうなぎの寝床のようにこちらは横に長く隣は町役場支所であり、周辺はゆたかな田園だった。旧家の名だたる農家が何軒かあった。

茨木は昭和二十三年茨木市制が敷かれた。北摂では文化が古く交通の便がよく恵まれていて、穏やかな地で人気があるとされている。吹田や高槻市にもかかる税務署や保健所、労働基準監督署があった。茨木は国鉄や阪急電鉄駅前の南方にも、大阪市内直近の平野であり、ここかしこから古墳が出る。高槻や茨木には古墳が数多くある。春日町には町風の広い古い農家が数軒あった。

父は、職業柄期待や信望が求められ、また市民に認められていた。春日町では当時、家付

きの四、五百坪の土地を信じられない程の価格、数百円で父であれば譲ってあげたいと言われたがまだ終戦後間もないころで、父や母は郷里に帰ればどちらも広い土地があるから、別に要らないと考えていた。近くの春日神社は格別大きな神前通りはなく、細い路地の通りである。長閑な広い田畑の地であり、商業地でなかったが、交通の便に関して旧西国街道や京都、大阪市、兵庫方面に行くためには、最高の利便性があり、最短の距離ともなり支点となる所だ。

父にとって家族である末っ子に近い私や弟の身体が弱かった為、心配する父母は地域の内科医師と懇意にしていた。M医師は当時五十歳頃だったが、この後も長いお付き合いがあった。父方伯父は漢方薬に対する広い知識があり、特に重宝されていた。母方曾祖父は大名の獣医師だったが、弟は子供の頃から言っていたことは「警察官と医師はどちらも人間相手で、人のために尽くし、人間的であって、よく似ている」としていた。

[倍賀(へか)における戦後の生活]

昭和二十三年、近所の直ぐ横に茨木警察署となる仮設庁舎が一時的に、隣の敷地に移転してきた。当時の写真から見ると署員は、五十人くらいで戦後三年ほどで社会は不安定な時代だった。世情が不安定な為、空き巣やコソ泥が多かった。私達が幼かったため恐ろしい事件

進駐軍と子供たち

は知らない。

町では米軍（ＧＨＱ）家族の日常着の比較的新しい古着の払い出しをしていた。アメリカの明るい配色は人気があった。また、空ではヘリコプターから広告チラシをばらまき、落としながら飛び交っていた。少しずつ、町も開放的になっていった。進駐軍のジープに乗った明るい感じがする軍隊（ＧＩ）のグリーンの帽子を被った兵士が子供達に菓子やガムなどを与えていたが、私達家族は誰一人拾うなどの行為をしないようにしていた。

駐在所から四、五軒南の家のＣさん宅の玄関が広く、戦後の物資不足に対し食料品や鍋などの物資統制で配給制だった。住民の各家庭に、基本となる米穀通帳があり、米以外の砂糖、パン

は食券制である。パン屋には食券とお金を持っていくと、あんパン一個五円、コッペパン一個二円五十銭だった。Cさん宅には他に配給の物には鍋などもあった。また、砂糖とお金を少し払えば、カルメラに焼いていた。甘いものがない時代で、よくその家の前では行列が出来ていた。焼きあがりは香ばしく人気があった。近くの大きな農家の民家で、近所の女子と一緒に私は小さな絵日傘を借り、日本舞踊を教えて貰って一緒に踊った楽しい思い出もある。当時、当家のある官舎の西方裏から少し離れた所にキリスト教会があり、洋風のシャレた感じがしていた。この教会で毎日曜日に開かれていた讃美歌を歌う日曜教室に富姉は熱心に参加していた。

三女富姉は、幼児から大阪弁を使わず、お洒落でおませだった。人の動きや気遣いには大変鋭敏だった。性格は幼児期から有名な初代玉櫛村村長のTさんのお気に入りだったことが、窺われるほど色白で愛嬌があった。性格は明るく自由闊達さがあり、何時も考えは、的を得て、ソフトで芯をしっかり持っている。

当時、近所の畑や農園で、農繁期に半日ほど、母がお手伝いを頼まれて行った家から、当時まだ珍しい食品だったハムをお礼に頂いたことがある。とても香りもよく、モダンで贅沢な気分になった。

昭和二十三年とある日の朝、長い間出征していた母の弟である叔父が突然この「へか」の

駐在所の細長い官舎の南方の勝手口から、少しかすれた優しい男の声で、「姉さんおりますか?」との声がして私も聞いた。母も直ぐに呼応して叔父を迎え、叔父と思わぬ出会いが出来、二人で泣いて大喜びしていた。

平成初期に叔父から聞いた話では、叔父は第二次大戦が始まって直ぐに、極寒のシベリアに徴兵され、満州のハルビンよりまだはるかに中央寄りの場所で収容され抑留された。当時のことでよく聞かされていたことであるが、冬の酷寒の寒さで、朝目が覚めて、隣の人を見ると冷たくなっていたことや草などを食べたと聞いた。叔父は詳しくは言わなかったが、帰国以来の胃痛による胃潰瘍の手術をしなければならないほど弱っていた。療養をするために当家に何カ月もいた。抑留時の影響で後遺症もあったと考える。抑留の話から想像すると、小柄で色白で華奢な叔父は本当に運よく帰ることが出来た。また運の良いことに同郷の人と、ナホトカの港で偶然出会えた。遠く何千キロも離れた地であり、この確率は何万分の一と考えられる。その時の奇遇をお互いに大きな声で確かめあって泣くほどの大喜びだった。

「茨木警察署転勤による転居」

父は茨木警察署に配属になり、転勤で市内駅前五丁目に転居した。当時の正式名は駅前本

通り五丁目という長い町名の所だ。市内の篤志家が持っている小さな家を少しの期間貸して貰えた。その家の床の間に六、七十センチの丈がある信楽のこげ茶色の狸が、とっくりと勧進帳という附けの通帳を腰の前かけに着けていた狸像が、狭い床の間に可愛くデンとあった。

建物は二戸が一棟になっていたが、小さい浴室があった。近隣の他所の家は、銭湯に行く人が多い中で随分助かった。当家を含め同様の造りつけの家が平行に二戸づつあり、後ろの筋に二戸少し横に間をおいて、二戸で計八戸あった。後ろの並びの子沢山の家は調味料を貸したりしたが、各戸が五十歩百歩のようだった。母は表面に出さないが、高い気位を持っていた。弟と隣の呼称が同じ男子とに差をつけるため、母は弟には皆から「ボンボン」と呼んでもらうようにした。当家は子供三人で家の広さは広くはないが、手ごろであり何よりお志だけで借りられているので、決して贅沢はいえなかった。それまでは街中の駐在所で町民からは、一目も二目も置かれ、期待や尊重を受けていた。

父は昭和二十四年、西本願寺大本山の研修を受け得度を得るため、出家修行に京都に出た。父は長兄の早世のため長い間苦しい思いを抱き続けていた。終戦後三、四年して、浄土真宗の信心の表現であるお念仏を唱えれば安らぎが得られ、修行はこの世の条理への理解と清算を求めていたことに由縁する。必死に信心のある読経をして、来世の極楽往生をもたらされ、

けじめをつけるための修行だった。西本願寺で厳格な修行を受け得度を為し得た。亡兄の今生の命が充分全う出来なかったことを思うと、父は自分の身を清くし、生きる証とするほか身の立てようがなかった。そのために血の滲むような修行を受けた。西本願寺西山大本山における戦後研修第一期生の登録を得て得度を全うした。

従兄のA雄さんから伝え聞くと、父は研修生の中でも成績が一番優秀で基本読経の一部である「三部請」の経の始めで、引導する長く続く独唱するところを何時も指名された。戦後直ぐのことであり、当時はまだ食糧難だった。本山でも修行は全寮制のために、家から米五升を布袋に入れ、風呂敷包みで持参した。翌年の二期生に郷里のK寺のKという跡取りの住職が、本山に入った折に、父は友人のすし屋の方が茨木の料飲協会長をされていて、そこの旨い巻き寿司を持って激励に行った。

このことが二十歳程年下の彼を熱く勇気づけた。父の死後、何十年経った後でもいまだに彼は感謝の言葉を従兄に述べていた。若い彼は縁が薄い京都の格式ある所で心細かったのだ。感激したことを四十年経っても、いまだに従兄に伝えていた。

父は修行の後、西本願寺の読経担当の方から推薦を受け、NHK大阪放送局で戦後初の読経のレコードを、古くからあった民間会社O楽器の仲介を受け、原盤を放送局で録音した。

二枚セットで一枚につき六から八題目で合計四十枚ほど作成してもらった。戦後大阪では始めて大げさに言えば、西日本で初めての「お経の録音」だと父から聞いた覚えがある。私達もよく聞いたが、声は澄んでいてよくとおり、諧調も正しくて美しい。レコードは実家や親戚、菩提寺関係に配った。その頃の材質は粗悪で横に置いておくと夏期は波を打つほど伸び、冬は乾燥すればヒビが入ったほど割れやすい製品だった。四十年経つとヒビが入った一枚きりとなったが、それを弟は録音テープでどうにか苦労して巻き取りとってくれた。昭和の終りごろに、弟は原盤を探し求めて当時の録音に携わった楽器会社の部長を尋ね回り、尼崎にある彼の自宅にもあたったりしたが、分からなかった。テープの残りは菩提寺に渡したことになっている。亡父の声で読まれた経は、私が十年前に梅田の大きなK書店で買った西本願寺系の経（五人ほどの斉唱）と聞き比べてみると、亡父の音階が正しくて美しいのが判る。

昭和二十五年頃、当時、朝のＮＨＫラジオの八時では「尋ね人の時間」があり、外地に取り残された人について長期間問い合わせがあった。父は昭和二十四年に得度をしていたが、戦後すぐのことであり一般市民に対し外地から戦死の知らせが多く入ってきた。犯罪や事故にあって亡くなった人だけでなく、近隣の方の弔いやその外身近な人のお葬式に時間が許せば、人の良い父はおっとり刀で袈裟を着けて、安寧を願い、お弔いの意味で読経を上げていた。関係者

昭和 28 年頃　刑事課執務室にて

の人々にはとても感謝された。

当時警察官が「得度」をしたことが珍しく、父方伯母が大阪M新聞の記者と懇意にしていたので、伯母の口添えで父が得度をしたことを紙面に取り上げた。紙面に十センチ四方で、狭い自宅の仏壇の前で正座して警察官の制服の上に袈裟を着け、数珠をかけて拝んでいる姿の写真記事が掲載された。

父の勤務先、茨木警察の所在地は市の中央にある養精中学の東側の隣接地だった。私達は新警察署を身近に思い、怖いイメージとは違って学校に見学に行く気持ちで訪れた。近所の男子で警察官にあこがれていた四年先輩の人達と訪れて、一緒に食堂で一度だけおいしいうどんを父からよばれたことがある。

駅前の家では、私が百日咳になり弟に移しそうになったので、母は必死に伝染らないように防御した。百日咳は法定伝染病に指定されるほど怖い病気で、他人に伝染してはいけないので、私は学校にも咳のためあまり行けなかった。後で母も学校について行ってくれて席の傍にいたり、近所の先輩にランドセルの運搬も頼んでくれ随分皆さんにお世話になった。遠足にも男性先生におぶってもらった。私は虚弱児だった。母は私達を連れて、疣水神社の水が薬代わりでよく効くと聞き、三キロほど離れてはいたが、家族三人連れの徒歩で行った。

やはり、私は家の中で遊ぶことが多かった。私は絵が好きで、小さな借家だったが所構わずクレヨンで描いていた。母は襖や壁に蝋石やクレヨンを使い、描いていても不思議に怒らなかった。余り学校に行けなかったが、連合美術展にはクラスの女子で一人入選した。

父は公務員で薄給だったが、母は家に出入りする食料品や生活用品を売る商人に対し気位や気概を持って応対していた。良く来る魚河岸の人は、毎朝一番列車で明石の魚棚に買いつけに行って、肩に魚箱、二、三箱を担ぎ、来る時は何時も午前十時頃に来た。新鮮で、活きの良い数種の魚類を、少しずつ沢山持って売りに来ていた。軒先で器用に手際よく捌き、少しの水を使って調理し見事だった。また、別に大きなリヤカーで食料品などを売りに来ていた二人連れは戦争未亡人と十歳年下の男性で小型コンビニ程の品を売りに来た。

吹田操車場になだれこむデモ隊

［吹田事件の頃］

この古い小住宅に住んでいた昭和二十七年頃のある夜、近くの本署から慌ただしく自転車で当直の若い警察官が非常招集に来た。父は「吹田に行ってほしい」と言われた。

当時、子供の私達でもラジオで聞いて不穏な空気を感じた。ストで国鉄の労使闘争の争議であり、全国的な先駆けとなる「吹田事件」という大きな事件だった。吹田の岸辺に西日本最大の操車場があったからだ。国鉄の労使関係における「動労と使用者側との闘争」が起こり、西日本では一番早く起きた大規模なストだった。後に私鉄に波及し、直ぐに全国的で大規模なストなった。各鉄道では、長期間となると鉄道会社自体に大きな影響を及ぼすので期間は短期だったが、春期に毎年の恒例となり、数年後国鉄の民営化につながった。

父は二十六、七年ころから司法主任や鑑識主任などを兼務

していたが、まだその他に大きく剣道の師範を署内で一人長く勤めていた。

個人として広く多方面でこれらの資格を持って実務に活かしていた人は少なかった。少年補導や防犯担当も一人で何役もこなしていた。府警本部の戦後第一期の婦人警察官にもその名を知られ、家でもよくその人達の名前まで言っていたから、防犯関係の仕事で婦人警察官方が、署まで訪ねて来られていたのだ。当時父の机上の木製の白いペンキで塗られた標識に担当係が明記されていた。そのころは中級幹部が少なく、部下の人から信頼され重宝された。

茨木市内は南北に直線で十五キロほどあるが、市民にとって父は古くから馴染みのベテランであり親しまれていた。二十七、八年頃から仕事の範囲が多くなり、職務全般の責任が地方に任された。気の良い父は任された職務に素早く取り組んでいた。職務の一方で、剣道師範と剣道試合の審判もしていた。また、逮捕術の師範も勤めていた。周りの人でご機嫌とりのうまく出来る人は要領よく上の階級になった。

父は気が短く負けず嫌いで、頭も明晰で、正直だった。また弱い人には優しかった。傍にいる人で理解してくれる人もいた。賢くても弱い人は上司への気遣いはしても、同僚や部下には知らぬ存ぜぬや踏みつけにする人もいる。何時の時代にも同様のことがある。

父のモットーは「君子危うきに近寄らず」や「臭いものにはふたをせよ」や「朱に交われ

ば赤になる」と種々あるが、主に職場で当時よく言っていたことで、人を窺う鋭いやり取りから出てきたものである。当時でも清潔さを通す人は少ないがいた。近くの席で狡猾な人に、父が挑む時は「（剣道の）面を着けて道場に来い」であり、潔い。だが、父の衛生的な清潔好きは、はた迷惑なくらいで「衛生部長」とも揶揄された。仕事部屋は容疑者や気の荒い同僚や分からない人の埃やごみがよく散らされ、父はその人が帰った後何回も拭いたり洗ったりした。優しい父は家では昭和二十年代半ばには、身に着けていた木綿や絣の着物の上から襷がけをして盥で洗濯や掃除をした。病気がちの母に代わり家事の手伝いを庭先や風呂場でしていた。家の掃除もいつも徹底して明晰で垢ぬけして気持ちよかった。

また別の面では、父は慰安会や慰労会では民踊や歌を披露したものだが、これがすこぶる巧く、「衛生部長」ばかりか「芸能部長」とまで言われたものだ。

同僚で武術の先生方がよく来られていたが、中でも中部地方出身の愛称「N」さんは私宅をあてにしてよく来られていた。当家はそう広くなく宿直の当番表が印刷されていた一枚が、狭い食堂に貼ってあって、私達も他の人の名前も覚えているほどだった。当家は本署にも近く、食べ物も調達し易く、人の良い父は下戸だったが、時折夜勤が終わった後の時間外に同僚や友人を家に招いた。私達は知り合いの町なかの酒屋へ、よく瓶を持って買いに行った。父が

優しいので集まり易かったのだ。集まりがあれば直ぐ分り、子供の私達にも親しみがあった。一、二年剣道の先輩で、若い時から大親友のSさんは玉櫛の家にも何度も来て、豪放で遠慮がなく、私宅の「ご飯を御櫃の底まで何時も残さず家族の分を食べていく」と、母は遠慮がちにこぼしていた。Sさんは二、三歳年上の先輩で上級者だったので圧されていたが、父にとって兄のようにしていた。Sさんは大物で、昭和四十年代から六十年代になっても、ずっと国体の大阪府の総監督として長い間活躍しておられた。

昭和 25 年　近畿管区学校　桜の木に手を掛けて

昭和二十六年頃戦後の世間では混乱があった。日本は日本文化の衰退を憂い、伝統と誇りを取り戻すため警察官にも日本文化の教養をというので一時上級幹部の学校で、「茶道」や「生け花」を学校教養に入れた。当時

私達家族の記憶にあるのは互助会の関係で家族への慰安会として「新歌舞伎」への招待があった。尤も、通行手段の乗り物は幌つきのトラックだった。参加した子供の数は少なかったが、他にも数家族いた。公演では月形半平太や揚げ巻きなどが出演する刃傷ものか世話物だった。邦楽の囃子方や役者のあでやかな衣装と掛け声に子供達でもその素晴らしさに惹かれた。

［昭和二十八年、始めて新築の自宅完成］

以前の家から近い所に、母が始めて自宅を新築するために、持っていた蓄財能力を発揮し実行した。旧宅より裏の方にあった空き地を見つけ、地主が「元木さんなら譲ってあげてもいい」と承諾してくれた。この地は本署に近く、後の中央の地となった。

母は経済観念が優れていて、当時昭和二十七年に母が言っていたことは三分の一の持ち金を持っていれば残金は月賦のちのローンで支払うのは可能であるとしっかり説いた。土地は知人から、建物は昔からの強い絆がある気風の良い方が、集まってくれて屋根の梁柱の太さの周囲は三十五センチほどあり、近隣ではこんな大きな立派な柱は見たことがないと古くから住む自治会長が言っていた。平屋だったが、建物は武家作り風の少し小型だった。玄関の広さは一間あまりあり、広くて両脇に大きな提灯を二つ掲げると暗闇の中ではとても幽玄で

厳かだった。

新居の戸建て家の並びは、昭和初期の戦後、近代的に利便性のある環境作りを推挙して鉄道会社が近郊都市に設けた住宅のように便利なところで、十軒ずつ筋向いに建てられた。戦後、新しく不動産の建売りの初期だった。市の中央部である。全国的な環境開発に沿って造成された。どの家もちょっと瀟洒な二階建てだった。前の通りはずっと細い通路となっていて少しの囲いと小さな門のある玄関を持っていた。

昭和四十年過ぎには当時の本署の裏にあり、本署から昼食に出る時や少し歩くにはちょうど良い距離だった。警察官の方からはそのならびを指して静かで落ち着きがあり、「哲学の道」と称されたが、少しおこがましい。通りが細かったので、ちょっと上等な長屋風でもあった。当家はその中心部にあった。

だが、この地帯は六月の雨季になると北部の山から流れる水が多量に下流にある小川に流れ込み、たちまち洪水となった。西側の端の角に当たる家の人は主人の転勤もあり、四十坪の土地つきで、当家に数十万といういくばくかの思いもよらない少額で売りたいと言ってきた。この家の土地はよく水が流れ込んでいたので、敬遠となった。

この件でも母は私に買うか否か尋ねてきた。何故幼い私に聞くのか、後で母に聞くゆとり

もなかった。台風時など近くの市役所前の小川も、年に一、二度、氾濫して足元から三十センチくらい上まで水かさが増し、当家の前に住んでいたJ党の支部長が当家の家族を起こして、仏壇を畳や机の上にのせてくれたが、一度流水の後家中の壁が落ちたことがある。

この前の家の御尊父だった人は、軍の将校で立派な髭を蓄えた美貌と風格のある写真が居間に掲げられていた。やはりその奥さんの秀逸な賢明さは、近所でも有名だった。誰それの記念日などが頭の中に入っていて、聞けば瞬時の即答を九十歳を超えていても、何時でも返してくれた。記憶を忘れていた私達が後で調べると全く正確であり恐れ入った。

当時の近隣で両隣りは、それぞれプライドを持ち、向こう三軒両隣は都会風でもたれ合いはなかった。

父は人を差別せず、親戚の人達にも信頼されていたので当家を頼りにし、また拠点にして商売の手を広げたりした。若い人たちは、東京や京都の大学受験や就職への中間地点となった。誰にとっても便利だったが、時代はバブルまでの間だった。母は倹約家だったが、父が優しかったので皆当家の家が狭くてただ寝るだけでも会いに来た。

［昭和三十一年三月　父　大阪府吹田警察署を警部補で定年退職］

昭和二十九年に警察法が改正され、警察は国警と地方自治体警察とが合体し、大阪は大阪府警本部となった。この時、父は警部補に昇進すると同時に大阪府吹田警察署に転勤することとなった。吹田は茨木より少し規模が大きく、大阪市にも近く、数年後千里ニュータウンや万博を迎え近郊大都市となるが、昭和三十一年、父はこの吹田署で定年退職を迎えた。

退職後も私や弟がまだ学生の身であり、働いてほしいと母から言われた。M医師の紹介で大手の製缶工場で警備の職に就いた。三年ほど働いた後、高血圧による脳軟化症になった。意識や頭脳も働きは通常だった。

身体の運動能力が半分ほど衰えていた程で、喋ることも早くはないが、話せたし理解できた。当時は未だ脳神経科の医師も少なく脳軟化症と言われたが、脳出血ほどひどくはなかった。父は生来頑健だったので、入院したことがなかったが、隠居してから病気のこともあり、よく長姉の所に養生に行っていた。

［昭和四十一年二月父没す　享年六十四歳］

寒風がふくなか夕方散歩に出て帰宅後倒れ、帰らぬ人となった。死去して数ヶ月後、叙勲が下された。吹田署では戦後初めてのことであり、「戦後のことを考慮して勲章は余り出さないようにされていた」と当時の担当者の評であり、「よく出たもの」と、当時はされた。

「人は一代　名は末代」、これは父が生前よく口にしていた言葉である。

父は亡くなってもさまざまな所に足跡を残していた。私より十歳年下の従兄が警察官となり勤務しだして五年も経たないうちに、専門の交通関係の警察官対象の講習で、父の同期生がＯＢで大手のタクシー会社の顧問になっていた。彼が講師に来て「何十年か前に何事でも素早くこなせる素晴らしい人が○○地方にいた。

このような人は二度と出てこないだろう」と言ったが、この直後に従兄が「その人は、茨木の「元木」と言いませんか？」と授業中に言ってくれて、「そうだが、なぜ君が知っているのか？」と尋ねられた。

「それは僕の伯父です」と胸を張って言ってくれた。また、弟が職員として近郊のＳ署に勤務していた昭和四十年代末に、この署に出入りしていた刀剣協会会長の人が署で言った事は、「十年ほど昔に当署で立派な警察官の元木という師範がおられたが、あなたは縁戚か」と尋ねられたようだ。協会は、Ｓ駅の近くにあり線路沿いの道を挟んで一階の屋根の上に三メー

トルほどもある大きな古い看板がのっていて自信や伝統が備わっていた感があった。私達は、毎日その前の東海道線を通勤電車で通っていた。この方も、父を気にかけておられたのだ。

まだ他に逸話もあるが、何よりも情の厚い父は同僚や同期生からも頼りにされていたのだ。その証に父の逝去を知った同僚が一年程の間に三人も立て続けに亡くなった。

父についてのまとめ

一、父からの教えと生活環境

亡くなる数年前に、大きなスチール製倉庫にあった古いリンゴの木箱を私に指し、「この中には大事な書類が入っているから」と一回だけ言った。亡くなった後二十五年ほどして見てみると、黄ばんだ書類は高さ何十センチもあった。黒ペンや青インクのガラスペンで書かれていて、随分虫食っていたようだった。その時父はどうこうしろと言わなかった。父の成算に見合っていなかったかも知れない。また先の目途が分からなかったのだ。今となっては何の件でどれくらい書かれていたのか藪の中だ。一方、一般社会から母に対しての評価は昔のことであり、駐在の留守番くらいにとられて弱かった。

父は小さなスーパーマンだった。父が活躍した時代は昭和初期から三十五年程の期間である。警察官としては三十年程の密度の高い勤務だった。誠実に清潔で、地域の人々に愛され、認知された。父は私が子供の頃は周りの男子学生や生徒から常に憧れられていたが、昔は小中学校で運動会などの開会の挨拶をする際、町長や校長に次いで挨拶も何回かした。三女の

富姉が中学在校時の夏期水泳大会で、始めに模範を示さなくてはならない時に飛び込みをすると、やんやの喝采や拍手を浴びた。私まで富姉の同級生や友人の男子生徒達に名前を覚えられた一因でもある。地域的に恵まれた北摂の都市で、亡き父は正義感の強い武人であり、地域住民からは常に強い信頼や期待を持たれていたが、以前住んでいた駅前住宅時代三～四メートルほどの通り道で、私より少し年上の兄弟がキャッチボールをしていた時、誤って父の後頭部に硬球の球をぶっつけてしまった。父は少し注意して怒っただけだった。他には在日朝鮮人の男子中学生が恐れもなく父の自転車を貸してほしいと言ってきて、二、三度貸したことがある。世間的にまだ自転車も少ない時代だった。父母は何処にでもいる人達で家族には子煩悩で、近隣の人にはお人好しで優しかった。

父の厳格さについて、戦時中の昭和十八年頃、いわくのありそうな贈り物が父の不在中に持って来られて、母は分からず預かっていた。父は帰宅後直ぐに子供たちに夜道をその人の家まで品物を送り返しに行かせた。また、決して贈与は受けないようにと強く言っていた。戦後九年ほど後にO市内の大きな署の署長が贈与を受けてはいけない先から、背広を一着貰って退職させられた。懲戒解雇だ。このことは当時大きく新聞の紙面に記されていた。彼は勿論恩給と退職金が無給となった。くどいように父は出所に気をつけないと罰せられると強く言っていた。

父母は終戦前、病気で長兄を失い気を落としていたが、父四十代後半頃に幼児期の私達を休日毎に、近畿地方にある六甲や仁川へハイキングに連れて行った。夏の互助会で海水浴に行った芦屋浜は、当時国鉄駅から近く芦屋の浜や甲子園浜にはまだ美しい松並木があり、砂浜も白く美しかった。

秋には京阪枚方公園でＮＨＫ大河ドラマで催していた「大菊人形展」に行ったが、ここは京阪バスで自宅から距離も近かった。切符が手に入り易かったが、昭和時代末期になって菊人形の催しものは閉鎖された。初詣は破魔矢や朱色の鳥居が数百と立ち並ぶ京都の八幡の「稲荷大社」にも行った。中年期を超えかかった父が疲れにも拘わらずよく連れて行った。

二、日常生活における父の職務上の規範と作法

○制服について

昭和時代初期の警察官の夏服は、白の麻や綿の丈夫な生地で縫製されていたが、酷暑の期間夏でも現代ほど蒸し暑さはなく、長袖で制服の持つ格好よさがあった。熱い日差しの下の

苦労が偲ばれる。冬のコートが支給されていたが、純毛やウールで出来ていて、ラシャのようでもあり随分重かった。冬にはマントや肩あてがあり保温になった。

私が小学生のころから在宅時、制服が洗濯屋から返されると、役職により数は違うが金モールを二本とか三本を袖先や肩の当たりにかがりながら着けていた。この作業は父の定年まで母から頼まれ手先の器用な私がした。

○指揮および護身のための防護用具、サーベルなど

大正末期から昭和初期の帯刀について、正式には指揮の出来る人，役務がある人で改まった時はサーベルが使用された。戦時期では一時期的に日本刀や軍刀の時期もあった。勿論真刀も含んだが全国的に金属類が不足していたので、終戦期には全て返還や没収があり、きれいになくなった。駅前自宅の物置にあった皮革製長靴やチョーカー（立襟）、ゲートル（小幅の布で膝まで覆うもの、主にカーキー色）などがあった。他に壊れかかった灰色の防毒マスクは白っぽいゴムの蛇腹のホースをつけて、不気味さを見せていた。これらは暫くたってから回収されたり処分したりした。子供は冬など数回帽子代わりや防災用に防空頭巾を用いたこともある。

○住まいでの起居生活

在職中は自宅にいても父は何時も気を抜くことはなかった。昭和二十七年ころ狭い家の中で、ある一定の時間厳しく、傍に人が来ないように言っていたことがあり、個人で私物の刀もあったので、傍で見ていたが打ち粉をして二～三センチある丸い綿花に粉を着けて、ポンポンと打って、椿油の液体を少しつけて錆びないように磨いていた。昔ほど出してこなかったが、父はまだその当時五十歳前だったが、普段は着物をよく着ていたので、子供が見てもすっきりしていて、端正な日本の美を見てとった。それほど様になっていた。刀の鍔を外し、和紙を銜え、真刀の手入れをした。この際、空気も流さないほど真剣で怖いほどの雰囲気があった。断わっておくが勿論その折に所持許可証があった。父が真竹を斜めに、迫真の呼吸で一刀のもとに何回か切り落としたと、父の同僚から聞いたことがあった。この所作は「居合道」になる。

また父は達筆で声も美しく、剣道の師範、逮捕術の教師、居合道も三段をもち剣道試合では審判をし、通常の職務では鑑識や司法主任や防犯係を兼務していた。また、時には鑑識の資格も持っていたので急務の鑑識のため隣市における刑事の関係の職務を補助することも

昭和 21 年　剣道五段昇段認定証を持つ

あった。当時は巡査部長でも本官が少なく、父には気軽に頼めて重宝された。オールマイティーではなかったか。警察官は年配になるほど仕事が激務という理由や肉体の酷使で身体が弱り、早い目に故郷に帰ったりした。また、気軽な地方の駐在所へ転勤を希望したり、早期退職した人が多かったようだ。故に父は市内に旧知の人が北から南までいて親しまれた。

三、礼儀と礼節

○剣道において

「剣道」は礼に始まり礼に終わる。礼は相手に対して敬意を持つものだ。父にとって「剣道」の場合は、指導する時、右利きが多いので、左利きの人は右利きに直されたように覚えている。私は幼児から道場で正座して見ていたが、稽古では左構えの人は当時殆んど見なかった。当時は子供の剣道着は贅沢品になっていたのか、茨木市では見なかった。父や長姉は生来左ききだったが、幼いころから直されて、器用にどちらでも使えるようになっていた。父は所作や行儀などの振る舞いが、正式に決まっていること、決められたことに関して自分や家族

や身の周りの人などでも、うるさくして自分も守ってきた。現在では個人の個性を重んじる風潮や教育の点から余計なこととされるが、格式のある所では食器やお箸の置き方まで決まっているので一理ある。母方の従兄に対しても五、六歳頃から食事の際、お箸の持ち方まで指導していた。

しかし、父の日常生活における振る舞いでは、風呂釜用の薪割りについて名人だった。当時風呂釜は街中ではどの家にも風呂があるのではなく、風呂のある家は薪や石炭をくべていた。父の左効き巻き割りには、定評があり綺麗に薪の長さがそろえて、売られていた薪の束から取り出しては一本ずつ割った。割り損ないはなく、薪割りと蠅たたきは百発百中だった。食事や作法に関して西宮に所在していた正統派で古式の伝統を持ったO流の家元まで、父は作法を学ぶため終戦前後に数回通い、身につけてきた。一般的な作法としてお茶碗やお箸の流儀は勿論、日本では食事の際には喋ってはならない。この作法は日本中どこに行っても尊ばれ、通じるマナーだった。当家はいかなる貧しい時でも各人の 誕生日には赤飯と本人には小さくても鯛のお頭をつけてくれた。母の気位の一つだった。父の口癖は「武士は食わねど高楊枝」と「ぼろは着てても心は錦」とよく唱えていた。

四、言葉遣い

○家庭や一般社会において

家庭においても一般社会においても、先ず相手を理解する上でコミュニケーションの「言葉遣い」によって評価され判断される。父は往年職務上遣っていた言葉で、刑事専門用語でもないが、ならず者など手強い人物によく遣っていた言葉もある。

○職場において

父が五十歳頃に、「おまえ」は、「御前」であり、おんまえである。「きさま」は「貴様」であり、汚い言葉ではないと言っていた。弟が幼い時悪戯をしていた時の声のかけ方には、まだ他の呼称を呼んでいた。

○社会的に

更に自分の身に関わること、自分がしたことについて「お」や「御」を遣ってはならない

と厳しくいっていたが、当然のことである。天皇陛下（さま）や皇太子（さま）のお言葉をよく聞いていれば、ご自身の親族の関係者には丁寧語を遣わない。即ち「私のご挨拶」とは言わない。自分が飼っている犬や植木や自分の身体に○○して上げるなどとは言わない。当家はサラリーマンだったが、言葉遣いは丁寧語というより良質だった。父や三女の姉は二人とも子供のころから殆んど標準語に近かった。三女の姉は若い時期銀行の合唱団にいたが、同窓会が東京であった時に、「日ごろ日常的に元木さんの大阪弁は聞いたことがない」と言われた。言葉遣いが上品であると品格も保て、育ちやお郷もよく偲ばれる。当家では家族にも幼児期からさんやちゃんづけで呼んでいた。また丁寧語の「お」は許される語にはつけていた。

五、日常の生活に常用した父の「格言」と「世の常」

生き方について、父の人間として生きる道や生き方への関わりは、善良なことには強い信念を持ち、ぶれずに行い、正しいことへの拘りを持ち、常に基本に基づいて行っていた。

仕事である警察官の職務執行においては、絶えず公正な判断をして、また規範に基づいて

迅速果敢な措置が求められた。また、警察官の適正性には、意気や覇気が求められる。一般社会で過ちを犯した人には、それ以上道を踏み外さず人に迷惑をかけないように、ずっと目を見開き、広い見地から心を皆に砕き配慮していた。

戦後十年間では、まだ国民に経済の回復や物資も不足していて、人は生活に困りやむなく物を盗んで犯罪に手をそめてしまった人も少なからずいた。

幼児期の戦後の光景では、現在では体面的に外されているが犯人逮捕の瞬間や捕まった際に手錠が掛かった姿・顔までを見せた。当時は顔や前科まで新聞に出ていた。後世において恥ずかしいというより悪事はしないようにと幼少児の教訓の戒めでもあった。現代では想像出来ないが、私達の幼少期には盗み人への施錠の光景に対する見聞の影響は大きい。

昭和三十年ころ、茨木神社参詣道の裏側に旅役者の小劇場が来ていた。大人達の恐ろしいような刃傷劇を、私と弟は一度見たことがあった。何故、私達子供に観劇させたのか分からなかった。現在の大人の劇画より現実的に突っ込んだもので、人々に恐ろしい目に合わせないような気構えを持たせるためのものか、そのことを警告するものだった。当時、市の中央公園で年に一回くらい大掛かりな外国人の猛獣使いもいる空中テントのサーカス団が来た。別の場の街頭では掛け軸用の紙に太筆で一気に空に昇る龍を描く人が、年に三、四回大道芸を

しに来ていた。当時夕方まで公園にいると、中国からの帰還者の子供もいてよく言われたことがある。子供の誘拐と同義語の「子盗り」は、誘拐のように恐ろしく、子供達には「子盗り」が来ると、そういわれて早々逃げ帰った。

○父からよく言われた諺と格言

・朝(あした)に道を聞かば夕べに死すとも可なり（仏説阿弥陀経の白骨の御文章より）。
朝早い時に生きるべき道を問うていれば夕方に死んでも良い。

・明日ありと思う心の仇桜、夜半に嵐のふかぬものかは。大切なものごとや、しなければならないことは、明日と言わずに今日中にしておく方が、賢明である。

・朝に紅顔ありて、夕べに白骨となれる身なり（経文より）。

・甘い話には、裏がある。

・石橋を三度たたいて渡る。

・石の上にも三年。

・一事が万事。

・一を知って十を知る。

・二兎を追う者は一兎を得ず。
・魚心あれば水心あり。
・思い込み激しかるべし。一つの事にとらわれると周りが見えなくなる。
・尾を振る犬は叩かれず。
・勝ってかぶとの尾を締めよ。油断大敵、謙虚にせよ。
・煙のない所に火は立たぬ。
・転ばぬ先の杖。
・人生は、重荷を負うて坂道を上るがごとし（徳川家康）。
・失敗は成功のもと。失敗をおそれていると何事も出来ない。
・朱に交われば赤くなる。友を選べ。
・過ぎたるはなお及ばざるが如し。
・精神一到何事かならざらん。
・千里の道も一歩から。
・出る杭は打たれる。
・成せばなる為さねばならぬ何事も、為さぬは人の為さざるなり。

・世間の口に戸は立てられぬ。
・なくて七癖、十人十色。
・為さぬ堪忍するが堪忍。我慢して許すこと。
・武士は食わねど高楊枝。
・人を見たら泥棒と思え。
・人は一代、名は末代。
・働かざるものは食うべからず。
・稔るほど頭を垂れる稲穂かな。

六、父の教え、ぶれない信念

父が退職直後の五十五歳時、往年の元気さはなかったが、大学浪人中の私に父が言ったことは、「何事でもよいから一つの道を進み、諦めず続けるようにすること」である。即ち、強く勧めることは「精神一到何事かならざらん」に通じる。数年後、父の逝去により私の信念

はたちまち横にぶれてしまった。個人個人の資質にもよるが、人は自ずと欲が出て横にぶれたり、意志が弱くなる。煩悩や人情を持ち、理性を隠すことばかりも出来ない。

父の遺志をよくも悪くも継いだのが若き日の長姉である。父の青春時代は「青雲に龍が天空に昇るが如くだった」とH師は、父の弔辞の中で述べられていた。父が多忙だった時、長姉は父が言ったことを聞くふりをした。

父は短気だったが、人が良いので自分の言ったことを了解されたと思い込んでいた節がある。私達姉弟は皆がお互いを思いやることも中途半端だった。姉達も頭は鋭く、他の人と同様負けず嫌いで、「狭隘」や「自信過剰」などと言っておられない。私は、姉達から享受をうけているばかりではない。長姉のぶれない強さは時代的な暦年と年の離れた年長だけあって理想を押し付けていることが多い。

人が死んでも、その人を知る人が居なくなった時が、本当に死ぬことになる（魯迅の言より）。父の死去以来四十五年になるが、現在でも京都亀岡に近い茨木市の北部には父を知る人が居る。また摂津市に近い所にも居る。つまり茨木の南北何キロにもわたって、五十年以上前に父が活躍をしていたことを知る、現在七十歳以上の高齢者が割合と居るという訳だ。そ

んな人達に父のことを尋ねると、懐かしそうに微笑んでくれる。

長姉の言に依れば、「昭和時代の北摂で、職業としての警察官は、一般的に尊敬されていて良き時代だった」と言う（平成二十四年の言）。

また昭和三十年頃、亡父の知名度を証すかのように、「茨木市　元木勇　様」とだけ書かれた賀状かハガキが届いたことがある。

では次に、そんな父の交友関係について見ておくことにしよう。

七、父と名士方との交友歴

○菩提寺院主で尊師でもおられたH氏

菩提寺院主で尊師でもおられたH氏は大阪府老人福祉協会会長を長くされていた。

父が中年期以降、先ず師と仰いだのが菩提寺の院主をしていたH師だった。師は若年時、N県から出家された。当家との関わりは長兄の逝去の頃からだった。師は七、八十歳頃から長く全国老人福祉協議会副会長を務めておられた。父にとって長男の死に対しての打撃は大き

かった。父は大正時代に大阪に居を構えた男であり、仕事柄職を失して簡単に帰郷することはかなわなかった。H師は父にとって無二の相談相手だった。H師は職務の厳しさを理解され、私達にも静かな口調で仰せられ、温かいお言葉の数々を頂いた。父昭和二十四年の得度の後には、大谷本廟末寺のS寺から「客僧」の位を授けて頂いた。父が六十四歳の時、恩師より先に他界してしまった。師が父を大切に思って下さっていたのは父の法名にある。

恐れ多くも、親鸞聖人の法名の反対語であった。聖人の法名は「善信」であられ、父の法名は、「信善」である。極めて意義深く考えられる。二、三年後に父を可愛がり、信頼を頂いていた大恩のある老師も九十四歳で黄泉の国へ旅立たれ大往生された。父の若い時からの苦境を知って引き上げて下さった。

○元知事S氏

父と同じ僧籍を持つ人で後に大阪府知事となった人だった。戦後、地域的な浄土真宗の研究会の「土曜会」を設けられ、毎週土曜日に熱心に山本B氏という説教の講師で著作もある有名な人と一緒に、よく地方のお寺に「法話」や「説教」をするため同行していた。S氏が知事になられたが、当選後は「知事室まで用があれば何時でもいらっしゃい」とおっしゃった。二度ほど行っ

たが会えずにいた。父のことだから予約を取って行ったが会えなかった。父は利用されたのだ。父は政治家の二面性を知る由もなく、彼を同じ僧籍を持つ身で全く懸念を持たなかった。

○元府会議員T氏

府会議員になった地域の医師だったT氏は日常私達家族にも歯の治療を施した。日頃父を親友呼ばわりしていた。父逝去の折には府議会開会中にも拘わらず駈けつけて参詣して下さった。後に出版された彼の豪華な自分史には父のことは書いていなかった。現在ほど政治規制法においてそれほど言われていず、当時各自の信頼度を写すバロメーターにもならなかった。

○裁判官D氏

同じ茨木市に住んでいた裁判官のD氏は市内高級地に居宅を構え、父にD氏が大事にしていた愛犬の子犬を託された。このシェパードは利口で、従兄が五十キロ以上離れた所に解き放ってきたが、四、五日経つと律義に早朝時裏の勝手口の木戸のところに帰ってきた。このシェパードも伯母宅のシェパードもどちらも、当時家族が食べていた肉類よりも上等なものを食べていたことが、窺えて持てあまされたので私宅も他家へ譲り渡した。

○大学教授Ｎ氏

昭和二十五年頃、Ｎ氏が父に相談に来ていたことは大阪市内の一等地、馬場町にあるＮＨＫ大阪局の西南の空き地のことで、昭和三十年代半ばを超えても、長期間整備されていなかった。この地を所有していたＮ先生は「この地を盲人協会の建物とするために寄贈すべきか？」と父に相談をするため駅前の小さな家に来たが、父は「まだそのまま持っておかれた方がこんな時勢だから」と勧めた。その後十年ほどたってからライトハウスの話題がニュースに出ていた。父はお金に綺麗な人間と信じて来られたのだ。

また、Ｎ先生の祖先は「江戸時代の大阪城代家老（じょうだいがろう）」ということで、市内馬場町近辺の土地の多くはＮ氏のものということだった。眉唾物かと疑ったが、この辺りは長い間整備されていなかった。大阪市中央区の体育館が出来たのも昭和四十年代だったと記憶する。このＮ先生は江戸時代の高槻城の城主の末裔でもあったようだ。この先生のことを幼児の私に言っても分からないと思って父が、私に「この方は大阪市内の高校の先生である」と言っていた。戦前、第三高校は大阪市大の前身だったかつての学長が同じ姓だ。この人が六、七歳の私の寝顔を見て、「この児はただものではない」などと言われたから、ことがややこしくなった。尤

も、私と父のその場限りのことだったのか。

確認したい人は、N先生の妻だったH子という、姉や私達の出身校の家庭科の先生だが、現在老人ホームに入っていて、ずっとN先生とは疎遠になっていた。

八、父の買い物

父の買い物は進取に富むことが多かった。終戦時でも他家になかった「幻灯機」と何十枚かのカード式のスライドがあった。懐かしい戦前の風景も映っていたが、何時の間にかなくなっていた。昭和二十年代だったが、高価なカメラは母方従兄が買ってくれて重宝した。

職場では同僚や上司へのお付き合いもあったが、義理と甲斐性で電化製品などを買っていた。警察にも外部から見た面と、見栄ではなく奉仕や甲斐性といったこととして筋を通すことがある。例えば、法務関係の収容所から斡旋で制作された物を年に一、二度木製の家具や子供用の玩具などが売りだされて、時折買ってきた。このことは、地域一般にも広範に宣伝されることもある。結構いい値である。派手さはなかったが、幼児用の押し車は可愛くて人気があり、小さな雑机は時に経机となった。何十年間使った。何時も父のお金の遣い方は綺麗だった。新しい電化製品や高価なものを買った時は、黙って嬉しそうにそっと出した。昭和三十

年ころに買ったテレビなどは、始め白黒でK電気製作所で、次の新社名が新K電機製作所で、次の改名で有名なN社となった。現、平成天皇陛下の昭和三十四年の御成婚時は、自宅の向こう三軒現両隣の七、八軒の家の中では当家だけのテレビに老若男女十五人ほどの人々が来られて、床の間に置いた三重何吋の白黒テレビに映るお馬車に優雅で熱狂的な「ご成婚パレード」を皆が熱く食い入るように見入った。

九、父と同士の朋友達

父は潔く計り知れないほどの温かさをどの人にも持っていた。かつて同僚だった人達にとっても、早すぎる父の死が大きなショックの引き金となった。兄弟のように親しかったIさんは父の葬式のために、隣市の高槻山中から自転車で十キロ以上ある所から駆け付けてくれた。この人はかつてJR隣の駅前が未だ寂れた時に、広大な土地を購入し山中に住んで畑もしていた。心を許した父に駅前に近い四、五百坪もある土地を分けたいと、かねてから口にしていた。同年輩のIさんは父の死からひと月も経たない間に亡くなられた。私達に直ぐ知らされず、

まさかという思いと、訪問する気持ちの準備もゆとりもなかった。また、かつての同僚で同じ茨木に住むSさんは市役所に非常勤嘱託で勤めていた。市役所は実家の隣にあったのでよく父を訪ねてきて、玄関で「よー」と声を掛けるだけで、座敷まで上がってきて父が寝ている食堂の堀炬燵に黙って足を突っ込み、父の寝姿を見て安心するために来ていた。明治時代の朋友のように、信頼に繋がれた大らかで、温かい心遣いが流れていた。ご子息は長兄と同年で当家の長兄のことを何時も褒めて下さっていた。次男の方は隣市の総部長まで勤められ評判が良かった。次の友人は同市に住むOBで大手交通機関の役職までした人で、やはり半年以内に亡くなり急だったために当時、父がお連れしたようで大きく寂しくなった。

前述の三人とも重病を持っておられた訳でないので、一番身近にいた私達は余計落胆した。父が男らしく優しかったので、頼りにされていたからだ。また、年上でいなせで端正であり、知的で落ち着いておられて茨木料飲協会長をされていたIさんは、亡父の法事に向かう若い私達に何かと気配りをして頂いた。父逝去の際私にかつて、父と親しんだことが「夢のようでした」と述べられた。この四人の方々は当家と良い関係を持つことが出来たが、少し早い死で悔しく私達は悲嘆にくれた。

父は死後半世紀近くになっても、父方従兄のAさんにまで言われたことは「父が肉体的な

心臓も強く元気だったのにそんなに早く逝って残念だ」と謂れ、私は大変心痛の思いをした。

姻　族

母　ユキノ（明治三十九年生　昭和五十九年没）

長男　保　大正十二年生～昭和十九年没

長姉　敏子　大正十五年生～現在に至る

次女　昭子　昭和十一年生～昭和十九年没

三女　富子　昭和十三年生～現在に至る

二男　出生後、即逝去す

四女　洋美　昭和十八年生～現在に至る

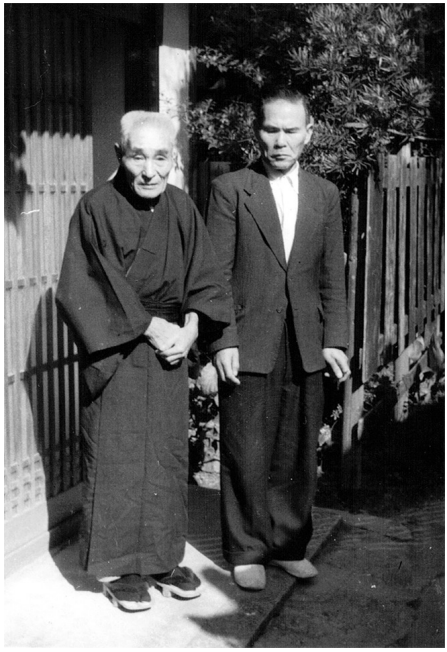
次男　隆　昭和二十年生～現在に至る

他の家庭と比べると、長兄や次女が早世したことにもよるが、姉弟間の年齢差は大きく親子ほどの年齢差に似る。三姉妹と聞くと、世間的にはほのぼのとしたイメージを持つが、私

達は各々が男性的な考えを持っている。また、自意識が強く、姉達は子供程の私や弟に負けまいとして、理想を押し付けてくる。

母の生家の実家のことから書き出したい。生家の家紋は下がり藤で、商号は山に一の字の下に藤を表していた。

藤に一は富士に掛ける言葉だった。尤も、どこにもある地域的な考えで「日本一」という意味を持たせた。



昭和32年　祖父（母方）信賢と父　玄関で

美山の名を被せる、有名でなだらかな小高い山の「眉山」に少し離れた山道に繋がる小高い狭い道を上ると、村で一つの蔵を持つのが実家である。蔵の中は、昭和初期まで手広く、大きな「商い」を営んでいたことが窺い知れた。蔵の高い天井は、七メートルほどは

あろうかと思われた。中の南北の梁に黒塗りの螺鈿（らでん）の模様が二つ、三つあり引き戸のあるお籠がつるされていた。屋根には、担ぐ角棒が一本ずつあり、担ぎ手は四人～六人で、暗い蔵のなかの宙にでんと上からつるされていた。別の物で黒色漆塗りで金の模様が入っていた什器は、三十各以上のものがあった。祖母はこれらが婚儀の道具で自慢だった。村に来るまでは地方の「姫」や「お嬢さん」と持ち上げられていた。祖母はI村の獣医の一人娘で、村では庄屋もしていた。プライドが高く、明治二十年代生まれでは、字を知っている数少ない人だった。」

祖母の叔母に当たる人が明治初期に大阪鴻池本家が倒産の憂き目にあっている時に如何なる理由か判らないが財産を持って嫁ぎ救った。この事実はS銀行百年記念誌に載っている。

ここまで、祖母三十三回忌の寄せ書きにあった長姉の記事を挿入した。この人が祖父信賢の妻に十七歳で入った。

祖父は物静かで温厚な人望厚い人だった。村では蔵のあるA家を金持ち、S家を地持ち、T家は娘持ちと謡われた。

戦時中、家に多く残されていた金貨や金の茶壺を供出させられたと祖母は口惜しそうに嘆いていた。

この三十三回忌では家の様子が往時を偲ばせているとなっているが、その後三年もすると

高速道や県の整備にかかるといって家もろとも潰してしまった。

長姉はその昔文学少女だったが、蔵には柿色布製に装丁された表紙の「文学全集」が何冊かあり、長姉は徳富蘆花の「想い出の記」をよく読んだと話していた。この全集は叔母達に買ったものである。長兄と長姉はこの母屋の離れで生まれ育った。長姉が育った時代は戦中時代で食料や物のない時代でもあった。毎年夏休みには里帰りしていた。

母の妹達は、祖母が大正時代に娘二人を女学校に行かせ、小学教師にまでさせたが、ルーツは祖母の根底にあるプライドにほかならぬ。また、孫達を校長にし、ひ孫に医者二人、娘婿は教育功労者として平成十五年に勲五等瑞宝章という栄誉ある賞を授与され祝賀会も盛大に行われた。祖母の偉大な底力が現在まで伝わっている確証だという長姉の伝言だ。また祖母の行動を誰もが叶わない外交術としている。この祖母の社交辞令をお手本にして、長姉が言っているのは、「親の背中を見て子は育つ」とはよく言ったもので、母は昭和二十年代、駅前の家に来る魚屋が、二、三日おきに売りに来た時も玄関の上り框に、正座して対話していた。二十年前の玉櫛村で、それを見て姉は育った。当時、長姉（敏子）は十五歳で一人前の口をきくもので、相手も娘扱いをせず割烹着を外し挨拶してくれた。

長じて、そのような素地からか、きちんと挨拶出来ない人はいくら賢くても、姉は認める

気にはなれなかった。

祖母の礼については、礼も過ぎれば失礼になることがある。また、義兄（長姉の夫）が言っているのは、祖母を持ちあげもせず、祖母は賢いけれど偉くはない。私も同感で言い得て妙である。

祖母の企図で、姉との婚姻をもたらされた気の良い義兄も被害者だったのだ。婚姻の形も千差万別あるし、地域的な祖母の考えは、代々血統に影響をもたらすとして、当時、長姉が言ったことは「跡取りの嫁は、将来、貴重な存在となる」。古い時代の考え方では余計に尤もである。昭和二十三年に家族法ができ、家族の地位の解消となり、民法の相続にも関連づけられ、現在では固執すべきではないと考えられる。

○本論の母について

大阪に出てきた時は、父が大阪市西区川口署に配属されていた。住まいは先ず茨木町中心地にあり、始めは大手町、次に北仲の町だった。母は育児とこちらの生活になじむことに必死だった。昭和四、五年頃から十年余りいたが、後に赴任した玉櫛村の駐在所での生活が母にとって至難の生活だった。戦時中のことでもあり、父が戸外の巡回中は留守居役で駐在所の

生活は町民からの各種届の事務補助もあり、家庭内不和、諍いの相談など多種な取り扱いがあった。裏庭は木戸もなく、学校に続いていて落ち着かなかった。戦時中でもあったが、日本社会にとっては昭和十六年から戦争の勃発もあり、どの家も生活物資もなく、国家からの軋轢がある厳しい時代だった。この玉櫛で始まる長兄や次姉の病気に加えて、三女富姉の世話や私に続いて弟が生まれて乳児の育児で手が離せない時期であり、母の方が大変だったのかと深く考えさせられた。長兄や次姉の逝去により父母の落胆が大きくあったが、その後の転勤に伴う転居となった。

倍賀の駐在所から駅前の住宅に移り、母はやっと奥様業に手を染め始め、落ち着きを取り戻した。父からの少ない公務員の給料生活と過酷な勤務をもつ警察官が外回りをする間に、母は一般の奥様方より何倍もの世界や生活をそれまでの二十年余りで知った。

新しい駅前の家まで駐在所を出てから二十年を過ぎ、母にとって先輩の方々、七、八十代の村で有力者だった老夫人や男性も絆の繋がりや絆と縁を求め来られた方は、決まった顔ぶれの方々だ。当家は街の中にあり、皆さん高齢者で、農閑期で訪ねてくるには格好の場だった。何時も二、三時間おられた。皆さん当家を頼りにして、気持ちの縁とされた。この駅前の家では、私と弟の小学校入学や私の病気などが、母にとっては子供の教育についての、喜びや期

待と共に大きな不安要素でもあり、気の休まる時はなかった。

新しい自宅の家に転居した後で、三年ほどして父は退職時を迎えた。長年労苦を掛けた母への感謝も含め母との記念とするため「日光と華厳の滝」への旅行のプレゼントをした。「日光を見ずして、結構とは言えない」、の古事に倣ったものだ。退職時になってから、父母は肉体の衰えを感じ始めた。生来、健康で下戸だった父は始め高血圧となり、母は糖尿病系統などの病が出始め、私と弟は高校卒業や在学を控えていた。父は少し早い勧奨方の定年退職となった。父は中年以降の無理な身体の酷使、母も高齢出産など無理の重なりなど数々の疲労が出てきたのだ。昭和四十一年二月、父が倒れた当時、母は父に対し上着を着せず、寒い夜戸外に散歩で出してしまった。父は本官の勤務時代冬でも蒲団が温まる間もなく過酷な勤務をずっと続けていた。そのうえ、中年以降の母は家事がおろそかになり、家事は出来ていなかった。父は少ない休日も普段の日も、よく母の洗濯や掃除の手伝いをした。昭和二十年代の洗濯のとき、父は前栽の庭で盥に水を注ぎ、着物姿で襷を掛けて水仕事をしていた。父が家にいる時は、ゆっくりしていることがなかった。父亡き後、母は悠々と長姉義兄達一家とバブルの波に乗って、昭和四十年代初期から近隣の諸外国へ、くまなく母を連れて外遊した。

一方私は進学をせず、担任教師も必死に引き留めていたが、とりあえず三女姉に引かれる

ように姉とは別の違う大手の銀行に行った。父は進学したければ、行っても良いと言ってくれた。三女の富姉は勘や要領が良く、あまり家にいなかった。姉自身は父と二人でよく洗濯していたと自負している。

長姉にとって昭和二十三年ころは、戦後の時代で国内では結婚に合う年齢の男性が極端に少なかったので、母方実家からの言いつけで遠縁にあたる同年の男性との話が進んだ。祖母の権限が絶対であり、長姉の考えは母系の姻族にかかっているほうが楽であり、姻族の女性が権力を握っていたので、助力してくれると負っていた。長姉の強運の根源である。義兄は働き者で、経営していた食料品製造がバブルに乗り、四国でも指折りの大きな財を成した。後に長姉は「I家の敏子」でなく、「A家の敏子である」と自分の息子に言われていた。

○父の姉「ミハル」（明治三十三年生〜昭和五十五年没）

伯母は姉や弟に挟まれた長女で、女性は一人だった。伯母は男性的な気骨を持っていた。十七歳時に嫁いだ先は、大阪市内で若年でも商才があり、羽ぶりも良い同郷の人だった。当時の写真から見るとダンディーだった。伯母は若い頃、看護婦を目指したこともあり、暫くしてから近くにいた伯父の親戚の大事な直近の男子を伯母の手当てで救っている。当時治療

が難しかった肺炎だった。治療にはアルコールを喉や胸のある肺の当たりに塗ったと聞いた。夫である萬吉氏は、後に「萬」から「敏」に変えた。敏の字は長姉の「敏」を気に入ったもので変えたと聞いている。敏彦氏は、昭和初期貿易や当時まだ珍しい自動車運転関係の仕事もし、戦時中にはガソリンもなく日本で出始めの木炭自動車の運転手から身を興した。木炭自動車は煙で汚れスピードも遅いが、それなりに少しの間使われた。伯父は開けた考えの持ち主だった。戦後直ぐに独立し、ドイツ製専門の高級外車の整備会社を松屋町筋に持ち、一気に経済人の仲間入りをした。昭和三十年ころ、出始めたパラボラアンテナ付きのＴＶ局中継用の大型車がよく修繕に来た。

伯母の覇気の強さは、昭和十年代半ば、大阪市港区築港の岸壁に陸軍軍隊で五百人ほどの大連隊が隊列を組んでいた場で、伯母は知人に人探しを頼まれ、隊列の前を横切るようにその人の名を大声で叫んで探し出し、依頼人に喜んで貰い自慢だった。

昭和十年代、大阪市都島区に住んだ時は、大阪市内に十七区あり、区の婦人会長をしていて市内全体の婦人部長もしていた。都島までの住まいは芦屋や帝塚山に近い北島や高級地ばかりに住み、ステータスを求めていた。その後、東区の釣鐘町でれっきとした会社の整備工場を持った。工場の門を開けると、まだ戦後間もない頃で、大阪城が前の小高い坂の上に障

害もなく正面からとらえられ、天守閣も見えていた。工場内に居宅があり、横には事務所と社長室も備え、その傍らには長さ三メートル、幅一、五メートルほどの大きなビリヤード台があり、スティック棒が七本程置いてあった。また、現代では遊興娯楽に上げられる麻雀が昭和時代の初期では上流社会の社交場だった。昭和四、五十年代のイメージとは違う。休日の自宅でする麻雀で、伯母は男性並みの勝気さを持ち、麻雀の腕はプロ級だといっていた。伯父にとっても、高齢になってからは、伯母を巴御前くらいに尊重していたようだ。伯母の腕や知恵を認めていたのか。伯母の腕は「半両で上げる」や「待てば海路の日和あり」などの男性的な言葉を持ち、大手高級デパートの重役や近隣の社長方にも引けを取らず、さし向った。釣鐘町の会社や居宅は大手M百貨店の傍で、私は昭和二十八年の十歳頃から日本美術院展を時には目にしていた。

昭和三十年代に工場は、天満橋を渡った北区に変わり、当時の国鉄ストの時は伯母も高齢であり、私は母から頼まれて伯母宅の家事手伝いをし、伯母の身体も看に行きながら、府庁内にある職場が近かったので、お世話をし泊らせて貰った。

終末期になってからは、伯母は奈良県にある高齢者施設で昭和五十五年に亡くなった。施設にいた時は、大阪市北区にある旧住所に帰りたがり、残念がっていた。当時の私は伯母の

面倒を見、住み替えさせてあげる力も権限もなかった。子供がいない伯母は欲がなかったので、後を引き渡したのは助けた孫でなく、その姉妹の娘婿である公立大学の教授などをしていた人達である。

父は同僚を連れて時折、大阪市内中央にある伯母宅に、自慢もあり一緒に行った。伯母の考えは現実主義で、「タラ、レバ」……だったら、……していれば、はいけないと授けてもらったが、弱い私達にはよう生かしていない。伯母の振る舞いは大阪商人の先を走る上質の行いだった。

○長姉　敏子（大正十五年生）のこと

父は大阪に出てきて暫くしてから、茨木北西の山手にある駐在所に赴任したが、一、二年して茨木町の中心にある警察署に転勤になり、転居は大手町になり、近くは元町にある役場や料亭や映画館のあるところとなった。ここで母や長兄と長姉を呼び寄せ、始めての家族団欒を持てた。次に入ったK町では、近所に住む町役場収入役宅に同年齢の女子宅があった。女子宅にはオルガンがあり、お手伝いさんもいた。一方、敏姉の考えでは母の実家に財力があったので、長姉の負けん気が首をもたげて、願いはかなわない筈がないと地団駄を踏んで当時

は珍しいオルガンの要求を通した。父の一か月分の給与がとんだ。昭和七、八年の頃だ。

次の玉櫛村への転勤に伴う転居は、古い地域で駐在所に住んだ。長姉は頼ってくる人達との挨拶や会話から地域社会を子供ながら学んだ。

長兄逝去後、兄に代わり父の外出時に長姉は母の助けをすることもあり、自分が大黒柱であろうとして、大変な勝気さと健気さを持って勤めた。成人前に夭折した長兄を、誰も他家の人は悪く言ったことがなかった。むしろ、父のいうことも聞かず、父母にとっては子供が先に逝くことは親不孝だとされた。

長兄と、半年後に早世した次姉も皆に惜しまれながら、玉櫛村で終わった。

昭和二十三年、母方祖母の勧めで長姉は少し離れた親戚で同い年のTさんと結婚した。彼は特攻隊に行く前の少年飛行兵に所属していたが、幸運にも出発前に終戦となった。当時は国内では、男性が出征をし、外国に出たまま未帰還となっていた人が多く、日本国内では若中年男性がとにかく少なかった。

数年前、長姉については以前リポートで記してあったことがある。

課題は、「身近な人の生活情報として感じたことについて」だった。私から見た「姉の美学、生活情報」としてのまとめとした。次の平成時代では義兄のお陰で、長姉は弟と豪華客船世

界一周をし、ライオンズクラブを通じて献血車の寄贈もした。

昭和時代、長姉の略歴は、

・昭和四十二年年始めの、ＮＨＫや厚生省主催の「全国婦人会議」で働く女性と家庭に徳島県代表で、両立していることを立証するために姉は出席した。ＮＨＫＴＶでは、オンエアーされた。

・五十歳代で、Ｎ新聞社刊の「帝王学」を独学でマスターした。

・昭和六十年「全国家庭料理コンクールで、最優勝の一つに選ばれた。ＮＨＫ・ＴＶ主催。

・義兄の仕事に随行した外国旅行は、世界各国の経済状況や生活ぶりを見るために、昭和時代に行った国の数だけでも五十六カ国をこえる。

長姉の昭和時代の運気は強いが、多事多難だった。この後の運気を後年見事に跳ね飛ばしている。年を重ねてもすることは怜悧で素早い。

現在八十五歳　健在

あとがき

昭和時代は波乱に満ちた激動の時代だった。当時、戦争の不気味な足音が近づきつつある中で、その幕が開かれた。直前の大正時代は経済が、急速に発展し、政治の民主化と思想や文化の近代化が進んだ時代だった。昭和十年代半ばから間もなく始まる第二次世界大戦によって、日本は世界大戦旋風に巻きこまれたし巻きこんだ。日本では終戦により多くの戦争犠牲者を出したが、この期を端緒として日本国民の社会意識は大きく舵を取り直すことが出来た。より一層の近代化を進めることができ、急なる躍進を遂げることができた。国民は本来、働き者なので復興が早かった。後には目覚ましいバブルの支えもあり、膨大な人間や経済の損失を立て直すことができた。

父愛蔵の書物は、数冊残っていたが、先年には、三冊しか残っていなかった。「楠公読本」「教行信書」「富士の人穴物語」が残されている。

「国民精神総動員と楠公読本　楠公精神への認識」があり、楠公さんが生きた時代の戦記や軍記になぞらえて、滅私奉公が掲載され「一人の力を信ぜよ」は誰もが各々自身の力を軽んじ、

その一言一行を心せず統制を乱すと結果はどうなるか。国民総動員の実が比較的挙がらないと仮定すると、人々が自分の力を軽んじられ、認識不足が禍している」という潰し、壊しようのない統制や統合が、要所を締める善悪邪正の識別を明敏として、悪にはくみせず、善には惜しみなく味方し、謳歌する人の良さを立派に持ちながらもいつのまにか正反対のある道を、知らずに善良顔で歩いているときがある。としていて「規範のまとまりがなければ、最初はいくらいいことを言っていても、国民全体として語った一人の怠慢や一人の自己中心を軽んずる心なき行動が原因としているだろことに思い及ぼせば、一人の力は決して僅少ではない。」とあり、父が言っていたことは「統制や統合を守ることが形作っていくことであり、成型を為す」ことにつながる。

規範を重視し、規制を守ることが、強さを保つ秘訣であるとしている。

この小史は、僅か八十頁足らずの読本だが、大阪朝日新聞社の従軍記者が当時の大戦に遭遇して記載したのは「前線における将兵達の寒暑の労を偲ぶ言葉として、酷寒零下三十度、酷熱百三十度などとたやすく口にされているが、実際ろう海線以北の敗残兵士ひ（土着民で武装する人々）討伐の軍に従った従軍記者が、現地の状況を生々しく書いていた」が、この記者はその後生還できたものと信じている。

小史では、将兵の労苦に対するほんの一瞬にすぎないと、重ねて書いているうえに、まだ「この労苦に優るとも劣らぬ労苦の数々を将兵達は繰り返し我が国の護りについていてくれる。」とあった。この労苦にたち諍ってくれた。戦争追随してくれた何百万人かの人たちのお陰で、我々国民は現在まで続いて生活出来ている。当家では、父、長兄ともに兵役検査を甲種合格だったが、籤逃れとなり、国外に出征していない。

父方は男兄弟が多いが、誰一人出征していない。また、世間では庶民の多くは十歳代で商店や会社に奉公に出されたが、誰一人近い親族では奉公していない。故に皆、一族郎党は社会的底辺の真実の苦労は知らない。

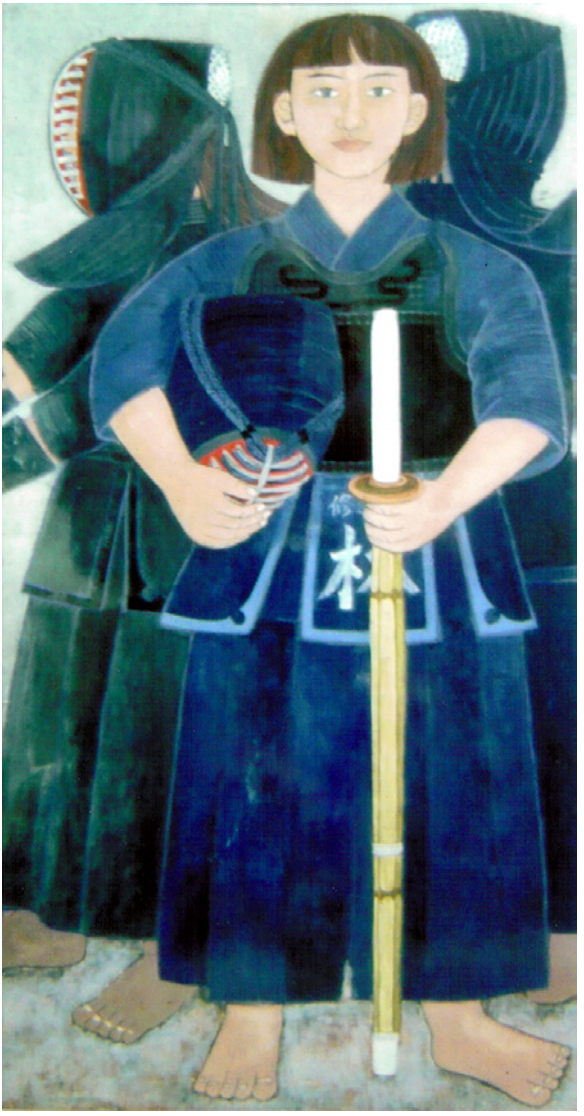
貧乏だったが、どうにか食は出来ていた程度だった。

前記の「教行信証」は親鸞の親書であり、「富士の人穴物語」は鎌倉時代、伊豆出身で相模で育った地方の曽我の十郎祐成、五郎時致兄弟が亡父暗殺に対する仇討、復讐物語り。父はこの物語では大義がある仇討ちによすがを求めたようだ。

人間誰もが、天の神や祖先、父母から授けて貰った命に 感謝を忘れないこと。周りの人に気配りをし、支えて下さった方々に感謝し、お応えできるよう懸命に誠実に命を全うしたい。

昭和時代、北摂の巷間にあった

父 元木　勇とその家族／写真集



元木　勇　略歴

明治 36 年 8 月	祖父　元木粂次郎の三男として　元木勇出生
大正 9 年頃	青年師範卒業
々年	後　国鉄勤務
大正 11 年	安藤ユキノと結婚
12 年	長男　保　誕生
15 年	大阪府警察部巡査拝命
15 年	長女　敏子誕生
昭和 2,3 年	大阪府三島郡石河村、駐在所赴任
昭和 4 年頃	大阪市西区川口署赴任
10 年	茨木村警察出張所勤務
14 年	玉櫛村駐在所赴任
21 年	剣道五段段位認定
22 年	倍賀駐在所赴任
同 期	巡査部長昇任
23 年	茨木市制施行
24 年	浄土真宗京都西本願寺西山大本山にて得度す
29 年	警察法改正により国警と地方自治体警察と合体し、大阪は大阪府警察本部となる
29 年	警部補昇任　吹田警察署勤務
31 年 3 月	定年退職
31 年	大東製缶㈱勤務
34 年	同　社　　退職
昭和 41 年 2 月	脳内出血により逝去
41 年 5 月	叙勲　勲位八等賜る　従七位
59 年 1 月	妻　ユキノ脳内出血により逝去

昭和時代、北摂のある警察官　元木勇とその家族
初版発行　2012 年 2 月 20 日

著　　者　元木洋美
本文組版　**編集工房ＤＥＰ**／桐生敏明
印刷・製本　モリモト印刷株式会社

© Hiromi Motoki, Printed in Japan 2012